

2 福生市を代表する緑と水の資源

福生市には、多様な緑と水の資源があります。ここでは、その中の代表的なものを整理します。

【多摩川とその河川敷】

関東山地を上流として、東京湾へと流れ込む多摩川が、福生市の西側を走っています。対岸に草花丘陵や加住丘陵を望む河川沿岸は、広場や遊歩道の整備が進み、広大な緑と水の空間が確保されています。

河川敷には多様な植生^{※P.100 用語解説}が広がっており、生き物のすみかとしても、多摩川とその河川敷は重要な空間です。福生市域の多摩川にも、多様な生き物の生息が確認されています。



■写真 多摩川河川敷

多摩川沿いには、柳山公園、かに坂公園、加美上水公園、多摩川中央公園、南公園の5つの公園が整備されており、緑や水、生き物と触れ合う自然観察会や野外体験などの環境教育に活用されています。河川敷に沿って走る遊歩道では、徒歩や自転車で川沿いの景色を楽しむ人でにぎわっています。

【崖線の緑】

かつて多摩川の雄大な流れは、その下刻(かこく)作用^{※P.100 用語解説}によって、武蔵野台地を削りながら河岸段丘を形づくりました。福生市でも立川段丘と拝島段丘が市内に広がっており、それぞれの段丘の崖線である立川崖線と拝島崖線は、市内の貴重な緑と水の空間を形成しています。

立川段丘は、八高線に沿った段丘面で、福生市の東半分を占めています。拝島崖線と比較して市街地が多く形成されていますが、原ヶ谷戸緑地や福生公園(文化の森)、玉川上水緑地など、まとまった緑と水の空間が確保されています。文化の森では市民団体が、雑木林の萌芽更新^{※P.102 用語解説}に取り組んでおり、陽射しが差し込む緑の空間がつけられています。



■写真 文化の森の雑木林

拝島段丘には青梅線が走っており、その崖線である拝島崖線は、熊川神社の南方部では高さ約17~18mの崖に発達しています。緑の連なりを形成する崖線は、豊かな植生を維持しており、崖線の斜面では地下水が流出し、湧水が各所にみられます。

【玉川上水】

福生市内を南北に縦断している玉川上水は、羽村取水堰から杉並区まで開渠（かいきょ）部分が続き、四谷にまで至る人工の上水路です。全長約 43km のうち、約 4km が福生市内を流れています。かつて、多摩川からの取水によって江戸へと上水を供給するために開削された歴史的な土木施設であり、現在でも、まちの中の水辺空間として、人々の暮らしの中で親しまれています。また、玉川上水新堀橋付近が、東京都の「新東京百景^{※P.100 用語解説}」や福生市の「ふっさ十景」^{※P.101 用語解説}に選ばれるなど、玉川上水は、福生市を代表する水の眺望でもあります。

玉川上水の周囲は、その多くが緑道や歩道によって整備され、人々が身近に緑と水を感じる空間となっていますが、福生市内には、緑道や歩道が途切れている箇所もあります。現在、福生市は、市民と連携して、玉川上水沿いで遊歩道整備が実現可能な地域を検討しており、玉川上水の管理者である東京都をはじめとする関係機関とも、玉川上水の保全手法について協議を進めています。



■写真 新堀橋から見た玉川上水

【熊川分水・福生分水】

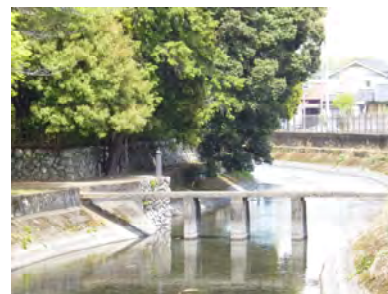
玉川上水から引かれた大小の分水は、灌漑（かんがい）用水^{※P.100 用語解説}として武蔵野を支えてきました。市内では、熊川分水と福生分水の2つの分水が今も流れています。

水不足に悩むかつての熊川村に、熊川分水が完成したのは明治23年のことです。その約2kmの水の流れは、村へ恵みをもたらし、以来、農業用水・工業用水・生活用水として、人々に親しまれてきました。上下水道が整備された現在、生活用水としての役目を終えた熊川分水の水量は、開削当時よりも減少し、暗渠（あんきょ）^{※P.100 用語解説}部分も増加傾向にあります。現在でも1年を通じて、水が静かに流れています。これは、年に1回、地元の町会によって行われている清掃や、地権者への地道な呼びかけ、分水沿いの自然体験イベント開催などを行っている市民活動の賜物です。

一方、福生分水^{*}は、玉川上水最上流の分水として、宮本橋付近から給水され、市内の田園の用水として利用されてきました。流れの大半は、暗渠となって見ることができませんが、一部は現在も住宅地の中を流れています。



■写真 熊川神社沿いの熊川分水



■写真 宮本橋付近の福生分水口

※本計画では、田村分水と設楽分水の2つの分水を合わせて福生分水とよびます。

田村分水は、江戸時代に田村家に引かれた分水であり、設楽分水は、戦後に田用水として造られた100m程度の分水で、田村分水と合流しています。

【湧水】

崖線の斜面や、崖線下の公園、社寺林では、崖線の地下水が湧出しています。湧き出した水は、段丘下を流れる下の川へと落ち、多摩川へと流れ込んでいます。その一部の水は、福生南公園のじゃぶじゃぶ池に利用され、子どもたちの遊び場になっています。



■写真 中福生公園裏の湧き水

古くは生活用水として利用されていた湧水は、市内の数箇所の地名の由来にもなるなど、福生の人々に親しまれてきました。近年、湧水地点周辺の開発が進んだことで地下水の涵養機能^{※P.100 用語解説}が低下し、湧水量が減少してその存続が危ぶまれています。

人々との関係が希薄になりつつある湧水ですが、平成 18 年には市民による調査団が、湧水の水質や流量の調査を行い、「湧水調査報告書—福生市の湧き水—」^{※P.102 用語解説}としてまとめました。その結果、福生市の湧水は、飲用としても利用できるほど、良好な水質が保たれていることが分かりました。東京都環境局の「湧水マップ」では、9 箇所の湧水地点が、福生市内で確認されています。また、崖線下のほたる公園では、市民主体の研究会によるホタルの養殖が行われており、毎年 6 月にはほたる祭が開催され、水辺や樹林地に舞うホタルを見ることができます。

【社寺林】

現在まで残る市内の社寺は、貴重な緑と水の空間となっています。福生市の指定文化財などに指定される大木や湧水など、人々と自然との関わり合いの中で、長年に渡って維持されてきた緑と水も多くみられます。



■写真 清岩院

特に、清岩院は、「数ヶ所から湧水が出て、せせらぎとなり、境内をまわっている。本堂前の池の水の透明度大。由緒ある禅寺。」として、東京の名湧水 57 選^{※P.101 用語解説}に選ばれています。

■ 図6 福生市内の水系



■ 写真 福生分水



■ 写真 綺屋の滝



■ 写真 地頭井戸



■ 写真 福生南公園の
じゃぶじゃぶ池

凡例	
..... 崖線(ハケ)	—— 河川・水面
■ 社寺境内地	—— 分水 開渠部分
● 湧水地点 分水 暗渠部分



■ 写真 どうどう橋

※湧水地点は、東京都環境局「湧水マップ」にもとづいています。
 ※本計画書内で、作成年が示されていない図表などは、
 平成25年12月31日現在の資料をもとに福生市が作成したものです。

【公園・緑地】

多摩川沿いには、多摩川中央公園など、河川敷を利用した公園が開設されています。拝島崖線沿いのせせらぎ遊歩道公園には、下の川が流れ、市街地の中の貴重な親水空間※P.100 用語解説となっています。立川崖線沿いにもみずくらいど公園や日光橋公園、原ヶ谷戸どんぐり公園など幾つかの公園・緑地が市民に供用されており、市の東部には、福東トモダチ公園のほか、熊川緑地や福東公園といった、緑に覆われた空間が整備されています。豊かな緑と地形を活かした公園が設置されている一方、小さいながらも身近な公園として市民に親しまれている公園がまちなかに設置されています。



■写真 多摩川中央公園

【道路沿いの緑】

歩いて暮らせるまちを標榜する福生市では、市内に12本の自転車・歩行者専用道が通っています。多摩川と平行して走る自転車・歩行者専用道沿いや玉川上水遊歩道沿いの植栽の維持管理など、遊歩道の環境向上が進み、やなぎ通り沿いに花壇が置かれるなど、まちなみの演出が図られています。

主要幹線道路においても、新奥多摩街道はイチョウが、奥多摩街道はトウカエデが、国道16号線沿いはワシントンヤシがそれぞれ植えられています。特に国道16号沿いは、商店街を中心とした市民と福生市との協働事業によって植樹が実施され、現在も協働による維持管理がなされています。



■写真 やなぎ通り沿いの花壇

【農地】

かつて豊かな水田地帯であった南田園・北田園地区を抱える福生市には、現在、市内に約17haの農地がありますが、これは、多摩地域の中では最も少ない値で、市域面積における耕地面積も、最も少なく1.7%となっています。

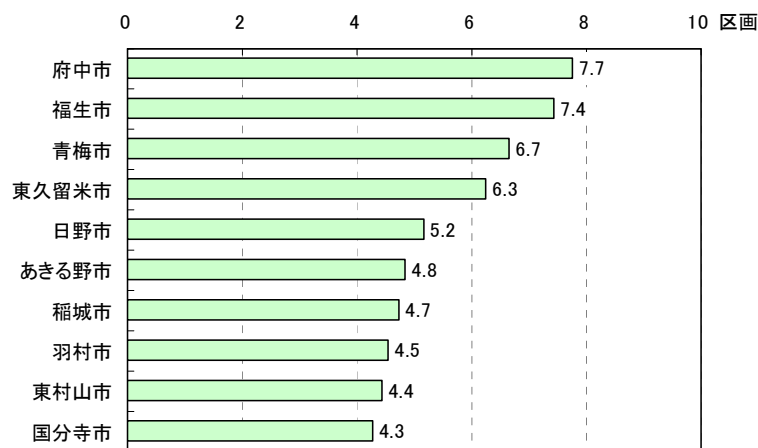
農地は、食料生産のほか、生態系保全や郷土景観の形成、農業体験の場となるなど、多様な機能を有しています。福生市では、市民に農作業を通じて「農」とふれあってもらうため、市民農園※P.100 用語解説を開園しています。



■写真 市民農園

平成25年度現在、9つの市民農園を1世帯につき1区画を貸し出しています。多摩地域の中でも、世帯あたりの市民農園區画数が2番目に高く、1000世帯あたり7.4区画を、福生市では貸し出しています。福生市は、その量自体は少ないものの、市民が身近に農を感じることができるまちといえます。

■図7 1000世帯あたりの市民農園區画数（多摩地域上位10市）



※平成24年度の資料に基づいているため、平成25年現在の市民農園の面積とは異なります。

資料：農林水産関係市町村別統計（農林水産省）

平成24年住民基本台帳人口・世帯数、平成23年度人口動態（市区町村別）（総務省）
にもとづき算出